松前大島噴火・寛保津波

檜山医師会
江差保健所・道立江差高等看護学院　伊　東　則　彦

コロナ禍大災難下でありますが、280年前頃、江戸時代松前藩・檜山に松前大島噴火・寛保津波が有りました。道南檜山も惨禍多い日本列島の一部にてご容赦願います。

１．檜山支庁災害対策要綱（初版・昭和38年）
《江戸時代松前藩では、アイヌ、出稼者は領民外。行方不明者は記載無し。》

筆者の防災教科書である檜山支庁災害対策要綱付録「檜山災害記録」に、『渡島大島噴火・寛保津波（1741年７月・旧歴）死者1,467名（うち江差120名死）、家屋流出729戸、家屋損壊33戸、船流出破壊1,521隻』と記載されている。

２．死者数について
《寛保津波死者数について、江戸幕府への正しい報告は罰せられたかも知れない。》

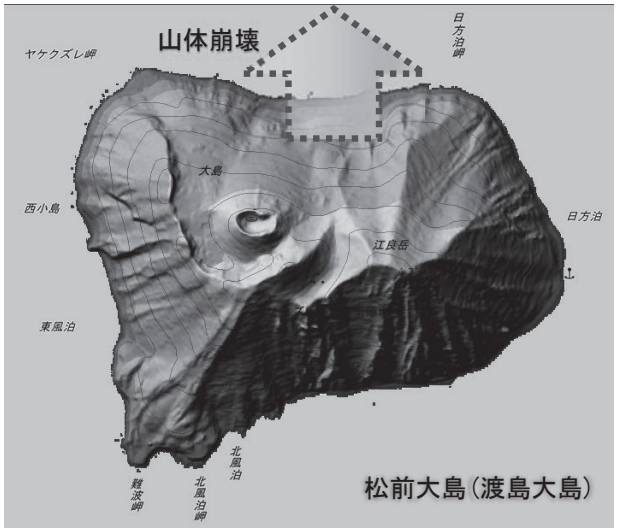
他に約2,800名死亡の記録（松前津波之事・越前永平寺文書）もあった。但し、これらは全て檀家（だんか）のみで、行方不明者が算入されてないと思われる。檀家（寺請制度、強制加入が基本）は、現在の住民票登録に相当。更には、アイヌ、出稼者も含まれていないと云う。やはり、当時からアイヌは、和人と区別、差別されていたことが分かった。松前藩の領民には少なくともカウントされなかった。

松前藩としては『正しい報告をすると罰せられる』ことを怖れたと思われる。即ち、江戸時代の幕藩体制は厳格で、改易･取り潰し、転封･領地替え、減封が頻回にあった。被災者が過多であれば、防災怠慢を幕府より咎められ、罰則の可能性に怯えたことと憶測する。

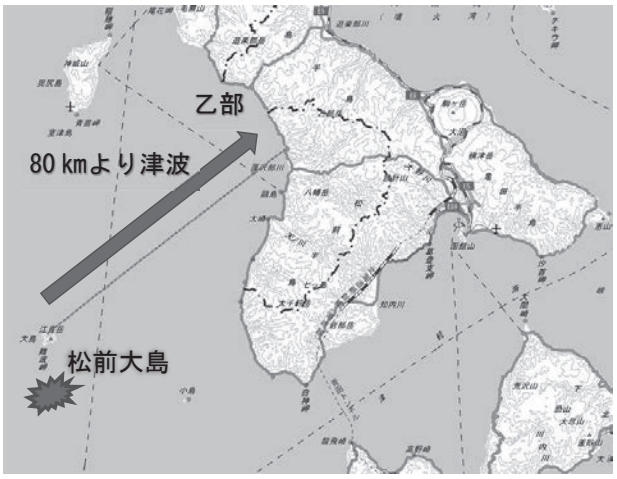
実際、江戸時代後半、松前藩は蝦夷地を短期間、江戸幕府に取り上げられた。即ち、藩財政難からの北方警備・対ロシア船防備不足等を咎められ、文化４年（1807年）から文政４年（1821年）までの14年間、陸奥梁川藩（福島県北部）へ移封。

【謝辞】葉梨孝幸氏（郷土史家、元乙部町議）の資料、著作、及び講話、助言に感謝致します。

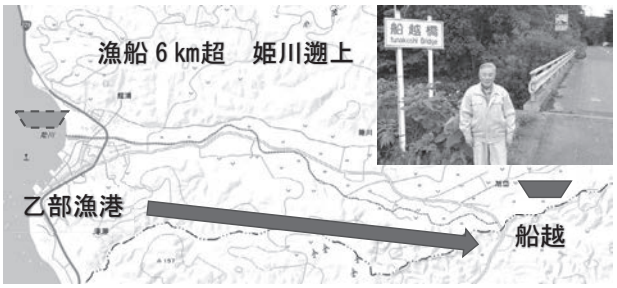
なお、全ての地図は国土地理院地図を改編した。



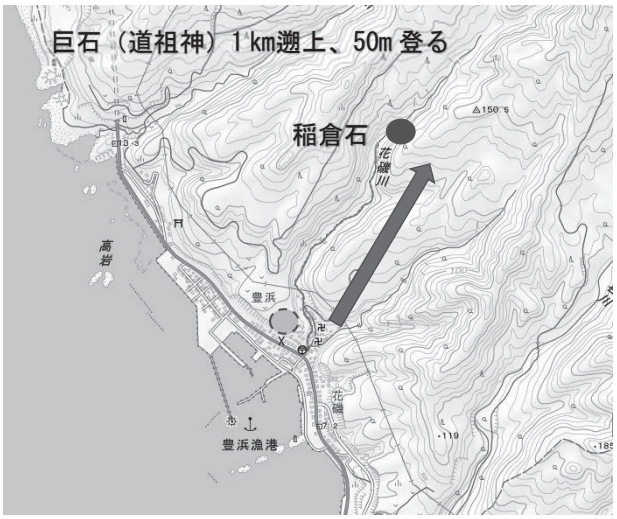
（註１『松前大島（まつまえおおしま）』；渡島管内松前町。面積約9.73㎢（2.5㎞×4.0㎞）、標高・江良岳（東山）737m、他に清部岳（西山）722m。松前町江良漁港の西50㎞。現在は無人島、避難港あり。昭和時代は漁師が夏季居住していたと云う。寛保元年（1741年）に噴火、山体崩壊・寛保津波を引き起こした。北側の寛保岳（648m・中央火口丘）斜面が岩屑）雪崩れ（がんせつなだれ）と云われている。元々はピラミッド・四角錐様であったが、噴火・山体崩壊にて北斜面が馬蹄形カルデラ様になった。その後19世紀以降現在まで、二百年超は顕著な火山活動無し。大水薙鳥（オオミズナギドリ）繁殖地として松前矢越道立自然公園に指定。国土地理院地図の改編）



（註２『寛保津波（かんぽつなみ）』；江戸時代中期、八代将軍・徳川吉宗公期、寛保元年（1741年）８月29日夕方（旧暦７月19日）に松前大島の山体崩壊｛岩屑雪崩れ（がんせつなだれ）｝により、波高20m超（上ノ国石崎）が発生した。この寛保津波が80㎞先の乙部にも来襲した。この３日前の渡島大島噴火が引き金になった。国土地理院地図の改編）



（註３『船越（ふなこし）』；乙部町市街地、乙部漁港北側に流れる姫川の上流6.8㎞に『船越』の地名が現在も残る。寛保津波によって漁船がここまで流された伝承がある。国土地理院地図の改編。）



（註４『稲倉石（いなくらいし）』；現在の稲倉石（道祖神）は乙部町・花磯川（豊浜川とも）上流の標高55mに位置する。寛保津波前は、下流の合流地点（乙部豊浜郵便局近く）標高５m弱にあったと云う。寛保津波により、花磯川渓谷に沿って、約10トン安山岩が水平方向約1㎞遡上、垂直方向には50m上昇したと推測される。国土地理院地図の改編。）